
Moon - 旅人たちの想い -

Ree

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M o o n - 旅人たちの想い -

【Nコード】

N 4 2 0 5 Q

【作者名】

R e e

【あらすじ】

伝説の王国を救うために、月の不思議な光に導かれたラティ（旅人）たちは、それぞれに物語を持っていた。

” M o o n ” では語られなかった誠や骨董屋の店主の回想に、しばし、耳を傾けて見ませんか？

（これは” M o o n ” の番外編になります。” M o o n ” をまだお読みでない方には、理解できないところもたくさんあるかと思いますが、よろしかったら” M o o n ” もお読みいただけると嬉しいです。）

エピソードからはじまり

誠はどうしても見送ると言い張る梨子と一緒に空港のロビーにいた。見送られるなんて照れくさい気がしたのだが、梨子に押し切られた形になった。

「本当にそれでいいの？」

「ああ、これは僕が持っているよりも、元あった場所にある方がいいと思うんだ。」

誠は大切そうに抱えた鞆を、ポンポンと二度、撫でるように叩いた。

「誠おじさん。」

「なんだい？」

「おじさんは、どうしてこのシンドリを私に貸してくれたの？」

そう、梨子はずっと気になっていたのだった。シンドリが光るとか、何かサインのようなものがあつたのだろうか。誠がシンドリを元あつたところへ持っていくてしまう前に、どうしても聞いておきたかつたのだ。

「それは、あの写真だよ。」

「えっ？」

「梨子が部屋に飾ってくれている写真さ。」

「あの蒼い写真？」

誠はクスツと、笑った。

― やっぱり、梨子はラティなんだな。

「僕が北欧にいるとき、家の近くに骨董屋があつたんだ。フィンランド人のおじいさんが、ひとりで作っている古い店だね。

その店の奥に、王様とそのお妃さまが並んでこちらを向いてたつている肖像画が飾ってあつた。どこか部屋の中の様だったが、王宮って感じはしなかったな。

僕はその絵が大好きで、毎日のように通っていたんだ。」

遠い目をして話す誠に梨子は少し驚いた様子だったが、それでも真剣なまなざしを誠に向けていた。

「お妃さまがきれいだったから？」

梨子がからかうように言ったのは、真剣になっていることへの照れ隠しでもあるのかもしれない。

「ああ、とつてもきれいだったよ。王様も立派に見えた。

でも、僕がその絵を好きだったのは、王様やお妃さまのせいじゃないんだ。」

「じゃあどうして？」

「二人の後ろにね、大きな窓があるんだ。そしてその窓に大きな月がかかっていたんだよ。」

蒼い、蒼い、どこまでも蒼い月がね。」

「それって、もしかして？」

梨子はシンドリの中で見た蒼い月を思い出していた。

誠は軽くうなづいて続けた。

「ある日、その店主が僕にその絵が好きか、と聞いてきた。

僕はまだ言葉が上手くしゃべれなかったけど、知っている単語を並べて、この月がとても蒼くてきれいだからだと伝えた。

そうしたら、彼は奥からシンドリを出してきてくれて僕にくれたんだよ。」

——ラティだけが月の色がわかるからだわ。

誠は、まるで梨子の考えていることがわかるかのように、しっかりと目を見つめて言った。

「あの写真が蒼いって言うてくれたのは、梨子だけだったんだよ。」

あれは月静かの森のはずれ。そういえば、あの場所から見る月が一番大きくてきれいだった。そして一番蒼く見えた。

「北欧ってどんどころなのかな。」

「一度、行ってみるといいよ。あの王国にとてもよく似た場所だよ。」

「そうなんだ？。月はきれい？」

誠はにっこりと微笑んだ。

「ああ。とても大きくて蒼い月が輝いている。」

「アリタリア航空795便 10時15分発 ヘルシンキ行きは
ただいまご搭乗の最終案内をしております。」

「じゃあ、もう、行くよ。」

「うん。いつてらっしゃい。」

梨子は誠の後ろ姿を見送った。誠は振り向かず、ただ一度片手を挙げただけでゲートの向こうに消えていった。

飛行機の中でコーヒーマーのサービスを受けながら、誠は梨子から渡された割れたムーンライトデューがはめ込まれたシンドリを眺めた。大きくヒビの入ったムーンライトデューは光ることを忘れたかのようだったが、それでも大きな威厳をもっているかのように見える。シンドリをしっかりとひざに抱きながら、誠は自分がラティとしてシンドリの王国へ行ったときのことを思い出していた。

・あの時、自分にできる精一杯をしたんだ。

自分に言い聞かせるようにつぶやいてはみたものの、何か大きなものをし残したような、それでいて大切なものを失くしたような気分になっていた。

現実逃避

大学を出てすぐに、誠は内定をもらっていた企業への就職よりも、有名な写真家・安野史郎オフィスで助手することを選んだ。

父親は大学3年の時に亡くなっていたが、十分な蓄えを残して逝ってくれたので母はそれで生活ができたし、姉も既に結婚していた。自分の生活を支えることだけを考えていればよかったことが慎重派の誠に珍しく大きな冒険を決断をさせたのだった。

思い切って夢への扉を開いた。はずだったのだが、現実は厳しく、これならきちんと就職して土日写真を撮っていればよかったなと思うことも少なくなかった。

それでも誠はまじめに一生懸命働いた。そして少しでも技術を盗もうと安野の一挙手一投足をじつと見つめていた。

そんな生活を始めて1年、安野に新人コンクールへの出品を薦められ、誠はつたないながらも自分の努力と腕を師匠に認められたと気持ちを引き締めて、一週間の撮影の旅に出た。

貧困で喘いでいる人たちの表情、世界遺産なみの景色…本当はそんな写真を撮りたかったが、時間と自分の貯金とを考えると海外へはおろか、他府県へ行くこともままならない。

姉から借りた車でできるだけ遠くへと行き、地元の子供たち、雲の流れ、山や海の景色、それこそ手当たり次第に撮りまくった。

実際に撮ってみると、昔からただ好きなだけできちんと学んだ訳ではなかった誠には、どんな風にして撮ればいいのかそれさえわからなかったが、なんとかものになりそうな写真を二、三枚現像し、一週間後には安野のところへ持っていった。

安野がパツパと見比べて、選んだ写真は夕暮れの景色を撮ったものだった。

何層にも色分けされた雲の合間に白い月が顔を出している。なんの

変哲もない作品だったが、誠は色のコントラストが好きな一枚だった。

その1ヶ月後、誠は安野の事務所を辞めていた。

コンクールで誠の作品が優秀賞に輝いたが、それは安野が手を回したことだったのだ。

授賞式の夜、若いカメラマンの芽をつぶしているという噂の立ち始めた自分の保身のために、自分の事務所からおとなしい、受賞したからと言って自分にはむかつたりしないような誠を担ぎ上げたただだと、つまらなさそうに助手でもあり愛人でもある事務所の女性スツッフに話しているのを偶然に聞いてしまったのだ。

誠はそれですっきりした。

受賞式であらためて大きく引き伸ばされた自分の作品を見て、「色見本みたいだな……」と感じたことも、誠への取材が最優秀賞の受賞者よりも多かったことも納得した。

写真界の重鎮、安野が書いた筋書き通りにみんなが動かされたただけだ。そしてその中心にいた自分は、何も気づかずピエロにもなりきれない存在であった。

事務所を辞めることについては安野もスツッフも独立するためかと疑ったし、安野からは露こつに

「誰のおかげで賞を取れたと思っているんだ。今、独立なんかしたらこれからこの世界では生きていけなくしてやる。わかっているな。」

と、釘を刺された。

誠は独立する訳ではない。ちょっと旅に出ているんなものを見てもいいだけだ、そう言い通した。

事実、退職したその夜には誠は飛行機に乗っていた。

行き先はどこでもよかった。ただ誠の中にコンクールで最優秀賞を受賞した憂いに満ちた女性の横顔の作品と、それが北欧で撮影されたものであったことがあったからだろうか。

誠は北欧を目指した。

チケット代金は、ちょうど受賞の賞金の半分の金額だった。

誠のはじまり

北欧についた誠を待っていたのは大きな壁だった。

住むところ、仕事、食べ物、言葉、とにかく何もかもどうしていいか分からない事だらけだ。

物質的なことではない。

友達も話す相手もない見知らぬ街で、孤独と戦うのは容易ではなかった。

それでもたどたどしい英語と、少しずつ覚えた現地の言葉とで簡易ホテルからアパートに移り、非合法ではあるが時給の安いアルバイトを始め、休日毎に写真を撮ってまわった。

ただ友人だけはそんなにすぐにできるものではなく、孤独は嫌いじゃない誠だったが、それでも淋しいと思うことが増えて行く毎日。

帰国することも考えたが、その度に受賞した経緯や、安野の言葉を出すと実際に帰る気持ちにはなれなかった。

それに北欧の町はとても魅力的だった。自然も多く、美しい景色にシャッターを押す手が止まらない。時折嫌なことを思い出すが、それでも自分の心に澄んだ目をもっていれば、必ずいい作品が撮れるはずだと信じシャッターを押し続けた。

何度も屋移りを余儀なくされたが、やっとなし落ち着き始めた場所、ある骨董屋を見つけた。

古びれた造りでなんとなくこちゃこちゃしている店だが、その中心に飾られている1枚の絵を見るためだけに誠は毎日のようにその骨董屋に通った。

その絵には王と女王が描かれていたのだが、その後ろに輝く大きく蒼い月が誠の心をとらえてはなさなかった。

絵の中の月なのに本当に満ち欠けするのではないかと思えるほどの美しさで、今にも輝きを放ちそうだった。

そんなある日、店主に声をかけられこの絵が好きなのかと聞かれて驚いた。

毎日のようにこの店に通ってきていたが、この店主らしき老人はただ椅子に座って本を読んでいるだけで、声を聞いたこともなければ動き回っている姿を見た事もなかった。

夢中で絵を見ていたからかもしれないが、足音も聞こえず、急に自分のそばに立っている老人を見て誠はとっさに「このおやじは瞬間移動でもできるのかもしれない。」と、思ってしまったくらいだ。もしこの老人にそんなことができたとしてもきつと誠は驚かないだろう。

「君は毎日、その絵を眺めている。好きかね。」

東洋人が珍しい街だ。ひよつとすると誠が言葉がわからないとも思っているかのように、老人はゆっくりと、わかりやすい発音で言った。

「はい。好きです。」

「生憎、その絵は売り物ではなくてね。」

「売り物じゃない？　じゃ、なんでこんなところに飾ってあるのだろう。」

誠は改めて店中を見回した。

ランプやサイドテーブル、置物や小さい絵画など多種多様なものが所狭しと置かれている。

ドアに向かって左側の壁などには、一面に様々な壁掛け時計が飾られていた。

どれもセンスのいいものばかりだが、無造作にまるでガラクタが放置してあるように置かれている。

この中の一体、どれとどれが売り物なんだ？

それにひきかえ、この絵だけが大切に守られるように飾られているのだ。

「もし売り物でも、きっと僕には買えません。」

誠の言葉が意外だったのか、老人は小さな鼻眼鏡をはずして、誠を品定めするように眺めた。

「気の済むまでゆっくりと見てくれよ。そうすれば僕がピンボーで才能もないのに夢ばかり追いかけている男だつてことがよくわかるはずだ。」

誠は自嘲気味に笑った。

今の自分の笑みは、知らない奴でも殴りたくなるような嫌な笑いだろうと思いつながら。

「買わないのなら、どうして毎日見ているんだ。」

意外にも老人は態度も口調も変えずに言った。

「この絵が好きだからです。」

「ふむ…。こんな絵のどこがそんなに好きなんだ？ おおかたその女王が綺麗だから…。というところか。」

「もちろんこの人物も魅力的ですが、それよりも僕はこの月の蒼さに心惹かれます。」

老人が息を飲む声に、誠は振り向いた。老人の顔にはあきらかに動揺が現れている。

「なにかまずいことでも言ったかな。」

「つ、月が蒼いだって…。」

しばらく誠を射るような目で見つめていた老人は、突然、何かを観念したかのように肩を落としたためいきをついた。まるで溜め息と一緒に老人のすべてを外に吐き出したような、あきらめたような表情

だ。

誠がどうしていいかわからずにいると、老人は奥から小さな箱を持って戻ってきた。

しかしその表情からはもうなにも読み取れない。

そして誠に箱を差出した。

「これを持って行きなさい。」

「えっ？」

「もう、わしが持っているべきではなかったのさ。」

それがシンドリだった。そして今の誠の始まりでもあり、終わりでもあったのかもしれない。

・僕は、シンドリの中に心を忘れてきてしまったのかもしれない。誠はそう思うことがよくあった。

そして今、こうして再び自分の手でこのシンドリを手放そうとしている。

・シフ…

シンドリの中で出会い、愛し、そして別れた恋人を想い、誠は窓から空を眺めた。

もつひとりのラティ

再び舞い戻ってきた街は、何一つ変わっていなかった。

ただシンドリにはめこまれたペンダントだけが以前とは違う。だからこそ、このシンドリを元の場所に返してやろう…。

誠はシンドリを持って、骨董屋を訪ねた。

骨董屋は昔のままのたたずまいでそこにあった。

店内も何も変わってはいない。

そして、驚くべきことにあの絵もあの時のままそこに飾られていた。

店主である老人が誠を見つけ近づいてきた。

「おお、君はあのときの…。」

自分のことを覚えていてくれたこの老人に、誠は少し驚きながらもシンドリを差し出した。

「これ、持って来たんだ。」

そういう誠に老人は嬉しそうにうなづいた。

「懐かしい。本当に懐かしい。」

老人はいつもの椅子にふたたび腰をかけると、向かい側の椅子を誠にすすめた。

「私がシンドリに入った時には、まだ王は生きていらしたんだ。お妃さまは大きなお腹をしていらした。」

ミーミルは次は男御子さまだと示されていると言っていた。

王女さまもいらした。とても整った顔をした赤ん坊だった。

確か…そう、フレイアと言ったな。とにかく幸せなご家族だった。」

突然、話し始めた老人の言葉に誠は驚いた。

「そんな話してもいいのかい？言葉にしてしまえば、何もかも…。」

老人は、誠の言葉を遮るように何度もうなずいている。

「私はもう年をとり過ぎてしまった。そろそろ肩の荷を下ろしたいんだ。」

そう言うと、老人は静かに話し始めた。

「どこまで話たかな…そう、王の一族がみんな幸せに暮らしておられたところまでだな。

もうお城に住まわれることなどないが、みんな王族に敬意を抱いていたし、王もそれに応えてガルムにわからないように、上手に王国の民を治めていらした。

そんな時、私がシンドリの中へ入っていったんだ。

私は売れない画家でね。

才能はないが自惚ればかりが強い若者だった。しかし、なかなかいい絵が描けない。

とうとう、ある時、早くに亡くなった友人のデッサン帳から構図を盗んでしまった。

ところが、その拝借した作品が有名な画商の目にとまり評価されてしまったんだ。

盗作が発覚するのも怖かったが、元々自分の才覚で描いた作品ではない。

私は期待されればされるほど、前にも増して描けなくなっていた。

だから、現実の世界に戻るのが嫌でよろこんでラティを引き受けたんだ。

そして執拗に旅を引き延ばした。

ラティとしての勘だとか、ペンダントのお告げだとか、もっともらしい理由をつけてね。

私の旅には、王が一緒だった。

止めるミーミルや仲間たちを振り切って、王は私と一緒に旅に出ると言い張った。

自分の王国を自分で護れない王など、王としての資格はない…とおっしゃってね。

それでも私は真剣ではなかったし、王国の行く末よりも自分の逃げ場所の確保をすることで精一杯だったんだ。

その結果、私の存在はガルムの知るところとなり、旅の途中にしかけられた罠にかかり王は命を落としてしまわれた。

私は、あわててミーミルのうちに引き返した。

そしてみんなに王の死を告げた。

誰もが嘆き悲しんだ。特にお妃さまの嘆きの深さは計り知れないほどだった。

なのに…なのに、誰ひとりとして私を責めるものはいなかった。みんなラティとしての私に尊敬と期待の念を抱き、王はラティの役に立てて幸せだったはずだとまで言った。

私はいたたまれなかったよ。

失意の中でお妃さまはミーミルの言通り子供を産み落とした。

男の子だった。フレイと名付けられたよ。

後からわかったのだが、王国の人々の名前は北欧神話から取ったものが多い。

北欧神話は王国の歴史そのものはまったく違うのだが、名前や風習など、とても似通った部分もある。

どうやらかつての王国はノルウェーの辺りにあったのだろうな。

フレイは王国が出来た時の王子の名前だったらしい。

お妃さまは、王子・フレイの命と引き換えるかのように息を引き

取ったんだ。

私は辛かった。

王と王妃の死は自分の責任だと思った。

私がいい加減な気持ちでラティなど引き受けなかったら、二人とも死なずにすんだのではないだろうか。

王も王妃もいない。

まだ言葉もしやべれない王女と、産まれたばかりの王子がいるだけで、王国はどうなってしまふのだろう。

なにもかもが…ひとりで背負うには重たかった。

結局、私は逃げるようにシンドリから出てきてしまったんだよ。

あるうことか、シンドリをそのまま何年も自分の手元に置いていた。自分の失敗が他のラティに知られてしまふのが怖かったんだ。

どこまでも自分勝手な奴だよ、私は。

それからの人生はもう墮落の一方だったなあ。

もちろん、もう二度と絵筆を握ることもなかったよ。

目をかけてくれた画商も飽きれて見放し、世間も私のことを忘れていった。

酒に溺れ、家族も友人もなくし、孤独になっていった。

私がそれを望んだんだがね。

あの絵は、私が描いた最後の作品だ。ミールの家で書いたんだ。他のものは何一つこちらの世界に持って帰ってこられなかったのに、あの絵だけが戻った私のそばに転がっていたんだ。

ところが、あの絵を見て誰もが色がなかった。どうして王と王妃を描いているのに、黒しか使っていないのか…と。

白いキャンパスに黒い絵の具。そんな絵がある訳などないのに…。

君がこの絵を蒼いと言ったときの私の驚きがわかるかい？

私は迷った。君にシンドリを渡すべきかどうか。

私があシンドリを持ち続けることは簡単だ。だけどそれではシンドリの意思を拒んでいるような気がしたんだ。

いや、もう重た過ぎて抱えきれなかったただけかもしれないな。とにかく、君に手渡すことにしたんだ。

きつとそれでよかったんだな。

今、そのシンドリを見ただけで、その頃とは様子が違っているのが分かる。

いや、なにも言わなくてもいい。

言葉にしてしまえば君の思い出は夢に変わる、そうだろう？だからひとつだけ、教えてくれ。

王国は救われたのかね？」

誠は少しためらったが、それでも大きくうなづいた。

「詳しいことは僕にも分かりません。

しかし、僕からシンドリを手渡した者が言っていました。みんな幸せになった…と。」

誠の言葉を聞いて、老人は満足そうに何度もうなづいた。

「それを聞いて私も救われたような気がしたよ。ありがとう。」

長い話は終わった。

こうしてこのシンドリは、一体、何人のラティの手から手へと受け継がれてきたのだろうか。そのラティ、ひとりひとりの旅の積み重ねが王国を救ったのだろうか。

「実は、このシンドリをあなたにお返ししに来たのです。」

「返す？　どういうことだ？」

「王国が救われた以上、このシンドリは元々、王国のあった場所に
戻してやるのが一番だと思ったんです。

だからこれを。」

誠はシンドリを老人へ差出した。

老人は差出そうとした手をひっこめて、小さく首を振った。

「今日、私はラティの掟を破ってしまった。今はまだラティとして
の自覚もあるが、掟を破ってしまった後に自分がどうなるのかまっ
たくわからない。

だから、君にお願いしたい。

明日もう一度ここへ着て、本当に私が持っていていいかどうかを君
が見極めてくれ。

もしダメだと思ったら、私がどんなに返してほしいと言っても決し
て渡さないでほしい。」

そう言うとき老人は眠ったように目を閉じて、もう誠が何を言っても
テコでも動きそうにない様子だった。

誠は諦めることにした。

とにかく、明日もう一度ここへ来てみよう。

「じゃ、また明日。」

誠はそう言うとき店を出た。

老人はまだ目を閉じたままだったが、かすかにうなづいたように
見えた。

ラティの掟

次の日、誠が骨董店に行くと老人はいつものようににこやかに出迎えてくれた。

しかし、誠が手に持っているシンドリを見て急に目を見開いた。「こ、こ、これは、昨日、夢で見た箱にとっても良く似ている。これも何かの縁かもしれない。是非、譲ってほしい。」

昨日までとはまるで別人のような老人に、誠は驚きよりも戸惑いを覚えた。

—きつと、掟を破ったからだろう。

白魔法は王国を護る。その力の一端が見えたような気がした。

掟に従い沈黙を護ろうとするラティは、おのずから王国を護ることになる。

でも、掟を護れない者はシンドリを悪用する可能性もある。

そうなつては王国なんて護れる訳がない。

そうやって王国は護られ続けてきた。

何人ものラティの手を渡つても、それでもシンドリは護られてきたのだ。

誠はシンドリの声を聞いたような思いで、老人に言った。

「夢は夢のままの方がいい。」

—彼にシンドリを預ける訳にはいかない。

誠はどうしても譲ってくれと言いよる老人を振り切り、店を出た。振り返るとあの絵画に描かれた月が色を失くしていた。

許されること 護ること

その夜、誠は梨子に電話をかけた。

誠は事情を話し、梨子にどうするべきかを聞いてみた。

王国を救ったラティは梨子だ。梨子こそがシンドリ自体の未来を決めるべきだと、誠は思ったのだった。

「シフさんの思い出がいっぱい詰まってるんだから、おじさんが持っていれば？」

梨子はあっさりとそう言った。

「きつと、シフさんもみんなも、それが一番喜ぶと思うな。」

梨子からは何も聞いていないから、結局、王国がどうなったのかも知らないが、誠なりに予想はしていた。

紋章のペンダントの中央には、ムーンライトデューらしきものはめ込まれているが、こなごなに砕け散っているのがわかる。

北欧のどこかに新しい国が出現した……というようなニュースも聞かない。

なにより、シンドリがふたたび固く閉まっているのだ。

王国はきつとシンドリの中に留まる選択をしたのだろう。

王国が救われたのならシンドリを閉ざしている意味はない。

それならば、むやみやたらに置き去りにするわけにもいかないだろう。

— 僕が護っていこう。

誠はシンドリを撫でてみた。

シンドリはなんの反応もしなかったが、なんだか王国から許しを得たような気がした。

シンドリから戻ってきてからずっと、誠はシフを失った悲しみばかりを引きずってきた。

でもそれは、傷つくことも、傷つけることもとても怖かったから、悲しみの中に逃げていただけだったんじゃないだろうか。

シフの言葉がよみがえってきた。

「ねえ、誠。私は思うのよ。

恨みや怒りからは、別の恨みや怒りしか生まれないわ。

誰もが誰かに許されて生きているのですもの。恨むのではなく、許さなくては。

もちろんガルムが憎いわ。ガルムが犯した過ちが憎い。

けれど、ガルムを許す事がこの王国を救う一歩になるような気がするの。」

―シフは僕を許してくれているだろうか。

きつと許してくれているのだろう。

だからこうして生きているんだ。

僕も前を向いて歩いていけないと、シフに顔向けできないな。

電話を切る時に見上げた月の中に、一瞬、シフが見えた。

「シフ……」

そのシフは優しい笑みをたたえたと、ゆっくりと消えていった。

次の旅へのプロローグ

そうして日本に戻ってきてから、誠はシフの写真の隣にこのシンドリを置いた。

シンドリであんなにたくさん写真を撮ったのにも関わらず、フィルムに残っていたのはシフの写真と梨子に渡したあの蒼い月の写真の2枚だけだった。

これが残ったのは、アートガルズのせめてもの「許し」だろうと思っていた。

そのシフと一緒にシンドリを護る。

ラティだった自分の、それが最後の使命なのだろう。

そう思うと誠は心にずつかかっていた霧が晴れたような気がしていた。

しばらくたったある夜のことだった。

いつものようにリビングの戸をあけると、誠は眩しい蒼い光に目がくらんだ。

シンドリが…、ムーンライトデューが輝いていたのだった。

次の旅へのプロローグ（後書き）

最後までお読みいただいております。ありがとうございます。

”Moon”についてみなさんからいただいた温かいお言葉に感動し、5年も放っておいたパート2を書き始めました。その前に（私としては意外だったのですが）度々、誠の旅のことやそれまでのラティのことについてご質問いただきましたので、ちょっと箸休めとしてこの番外編を投稿しました。

実はこれは”Moon”構想の段階で、既に出来上がっていたものです。それに少しだけ手を加えて、パート2へと繋がるものにさせていただきました。

みなさんに楽しんでいただけたら幸いです。

作者より

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4205q/>

Moon - 旅人たちの想い -

2011年8月4日12時45分発行